

WOMEN'S

NEWS

2002 DECEMBER

VOL. 41

S

SPORTS

F

FOUNDATION



1930年の第3回女子オリンピック(チェコ・プラハ)に出場した人見絹枝(前列左端)と5人の後輩たち(小原敏彦氏提供)

JAPAN

Message	歴史を伝えていくということ	三ッ谷洋子	2
インタビュー	女性スポーツの発展に期待を寄せるIOC委員	猪谷千春さん	3
WSF Japan	「女性スポーツセミナー TOKYO」開催		6
オピニオン	レディース陸上大会の運営で痛感した経験の大切さ	原悦子	8
Column	Eリーグを目指す「美人」サッカーチーム(上)	本田美登里	9
会員の広場	田中菊子、(財)全日本ボウリング協会、島健		10
事務局便り			11

歴史を伝えていくということ

皆様、20周年記念誌に目を通していただけましたか。「昔の写真が珍しく、内容も面白くて2度も読み返した」「このような女性スポーツの本は、今までになかった。とても参考になる」「講演の資料としてとても役立った」等、感想をいただきました。

会員以外では、男性が予想以上に興味を持ってくれました。女子選手の指導者や、スポーツ関連企業の担当者などです。女性の視点でまとめた同書に男性が興味を持って、何の不思議もないはずなのですが、なぜか意外な印象を持ちました。

しかし、よく考えてみると、私たち女性はこれまで男性の視点でまとめられた歴史を教わり、興味を持って接してきました。これまで『女性体育の歴史』はあっても『女性スポーツの歴史』はなかったということで、「面白そう」と感じてもらったようです。

素晴らしい先人に会える機会

歴史をひもとく作業の楽しみの1つは、素晴らしい先人に会えることだと思います。「女性スポーツセミナー TOKYO」で、講演のテーマとした人見絹枝も、その1人です。講演をお願いした小原敏彦さんは、人見が世界のトップアスリートという理由だけでなく、素晴らしい人柄に魅入られ、2冊の著作を出されました。

きっかけは、1971年に日中友好体育訪中団として訪れた中国での体験でした。北京体育学院の先生たちとの懇談の場で、人見の名前がでてきました。中国側から「日本が大変だった時代に、“東洋の明星”と呼ばれ大活躍した人見絹枝」について話しましょうといわれ、驚きます。

小原さんは学生時代(埼玉大学)、陸上競技の選手だったのですが、人見については名前を知る程度で、ほとんど話ができませんでした。帰国して昔の新聞記事や関連資料、彼女の著作などを読み、のめり込んでしまったそうです。

「記念誌」ではあまりスペースを割けなかつ

た井口阿くり(いのくち・あくり)も、私に関心を持った先人の1人です。明治32年(1899)に初の体育留学生として米国に渡ります。ノーサンプトンのスミス・カレッジでスウェーデン式体操等を学び、それを日本に伝えました。

関連資料として掲載したかったのですが著作権の都合で断念したのが、彼女をとりあげた地元新聞です。1902年4月6日付New York Heraldに「Tiny Jap Maid's Mission」のタイトルで、日本からの留学生として紹介されています。体操着姿(長めのブルマーにセラー服のような上着で、太いバーにぶら下がっているものなど)の写真が4枚添えられています。

タイトルの「Jap」という略称が気になります。また「Maid」というのは、「女中」でしょうか、「娘」の意味でしょうか。実際にどんな生活をしていたのか、さらに知りたい思いにかられました。いずれにしても、70年以上も前に世界のトップで活躍した人見、1世紀前に米国で最先端の体操法を学んで日本に伝えた井口。日本の女性スポーツには1世紀以上の歴史があり、世界に羽ばたいた先人がいることを知り、大いに勇気づけられ、また誇りに思いました。

いつか女性スポーツ博物館を

1984年のロサンゼルス・オリンピックの際、私はオリンピック・スタジアムの横にあるアフロ・アメリカン博物館を訪れました。オリンピックで活躍した黒人選手の写真やゆかりの品々が、輝かしい足跡を物語っていました。ベルリン・オリンピック(1936年)の英雄、陸上4種目を制したジェシー・オーエンスに始まり、メキシコ・オリンピック(1968年)の表彰台で黒手袋をはめ、人種差別に抗議した200m優勝のトミー・スミスらの姿もありました。

館内で小さな子どもを連れてきた母親が、腰をかかめてパネルの説明している光景を目にしました。その時から、「女性スポーツ博物館を作りたい」というのが、私の夢になりました。

インタビュー

日本の女性スポーツの発展に期待を寄せる

IOC 委員 猪谷千春さん

最近のスポーツ界の大きな変化の中で、最も目につくものは、何と言っても女性があらゆる競技に進出しているということではないでしょうか。しかし一方、日本のスポーツ団体の役員は相変わらず男性が圧倒的多数を占めています。

このような状況は、世界の流れからはどのように見えるのか、IOC(国際オリンピック委員会)委員の猪谷千春さんにうかがってみました。

(12月11日=聞き手:WSF ジャパン代表 ミツ谷洋子)



シドニーオリンピックでは、日本選手の41%が女性だった

(市民の声援を受け街を走り抜けるトライアスロン競技の選手たち=社)日本トライアスロン連合)

「女性の時代」に呼応するIOC

— IOCは2005年末までに各国NOC(オリンピック委員会)等の役員に女性を登用するよう目標を設けました。新聞報道では、アニタ・デフランツさん(黒人女性初のIOC委員:米国)が積極的に推進したとのことですね。

猪谷 彼女、というよりは、IOCの理事会で「今後は女性スポーツの啓蒙が必要だ」という意見が多く出てきて、それを推進する女性委員会(Women and Sport Working Group)が作られ、彼女が理事をしていたので、まとめ役になったんです。

— 彼女が提案したわけではないんですね。

猪谷 ご存知のように、大昔のオリンピックにはまったく女性の出番がありませんでした。

— クーベルタンは、女性は試合を見ているだけでいいんだといっていますね。ただ、第2回大会から女性はゴルフとテニスが入り、大会ごとに少しずつ増えていきますが、「女性らしいスポーツならよい」ということです。

猪谷 当時の写真を見てると、ゴルフなんか、かなりエレガントにやっていたんでしょう。

— 女性スポーツの歴史は、その時代の「女らしさ」との戦いという側面があるんですが、猪谷さんのお母様は、日本初の女性スキー・ジャンパーだそうですね。

猪谷 親父は日本に輸入されたスキーを見て、自分でスキー板を作って始めたんですが、それを見てお袋も始めた。ジャンプは35メートルくらい飛んだらしいですよ。生まれる前のことで残念ながら見てはいないけれど、写真は残っています。

— オリンピックの話に戻りますが、クーベルタンが会長をやめた後の第9回大会(1928年、アムステルダム)で、ようやく陸上認められました。

猪谷 最近では女子レスリングも入ることに決まり、女子選手が増えるなら組織の役員も増やしていこうということになったんです。

— 猪谷さんはJOC(日本オリンピック委員会)委員でもいらっしゃる訳で、前号の対談で小野清

子さん (TOL 会長、WSF ジャパン会員) が、「JOC の理事会で女性の理事をもっと登用すべきだといってくださいるのは、猪谷さんだけ」とおっしゃっていました。

猪谷 IOC が 10% (2000 年末まで)、20% (2005 年末まで) というガイドラインを出したのですから、JOC は当然それを順守すべきで、私は 2 年ごとの役員改選のたびにそうしているんです。

— 現在、JOC の女性役員は理事が河盛敬子さん (全日本なぎなた連盟理事長)、監事が小野清子さんです。これまで JOC の理事は河盛さんか小野さんかのどちらか 1 人で、なかなか増えません。

スポーツ団体の役職というのは、男性にとっては名誉職です。そのような重要なポジションを女性に譲るといのは、男性にとってはかなり抵抗があるのではないかなと思うんですが。

猪谷 かつてはそういう意味合いが強かったかも知れませんが、今では時代が変わってきています。日本のスポーツ団体も女性の役員をもっと積極的に登用して、女性スポーツの振興を図るべきです。

ネックはシステムと意識

— 今の社会状況を見ると、スポーツに期待されている役割には大きなものがあります。それだけに、女性も含め幅広い意見を取り込んでいく姿勢が大事です。

猪谷 日本の女性の場合、第一線を退くと、家庭に入って子育てや夫のめんどうを見て 10 数年がかかってしまいますね。その間、スポーツから隔離されるということも手伝って、時代から取り残され、役員として入ることがむずかしくなっていると思います。

ヨーロッパでは、託児所に子どもを預けて、育児をしながらスポーツ界に踏み留まって、スポーツに貢献することもできます。

— 働く女性にとっての仕事と、女性の選手にとってのスポーツというのは、同じような意味を持っています。出産や育児は、仕事やスポーツを

続ける上で、女性に大きな負担を強いることになります。

猪谷 日本はそういう場合のシステムが遅れていますね。そして女性がもろに被害を被っている。女性の役員が増えないのは、もう一つ理由があります。ヤマトナデシコは控えめであることから、自ら進んで自分を売り込むことは得意でない。ですから、一線から 10 数年も退いていると、カムバックがむずかしくなるのです。

— それに社会のテンポについていけません。



「会長推薦で女性理事を」と語る猪谷さん

猪谷 今、私がいちばん心配しているのは、若い子たちです。背は伸びて手足も長くなって西洋人なみになったけれど、体力が伴っていない。これは何とかしなければいけない。現在、男性の平均寿命は 78 歳、女性はなぜか 82 歳。今の若い子が年を取ったら、半分以上は寝たきりか車椅子の生活になるんじゃないか。友達の医者に聞いたら、「その頃には平均寿命も今より短くなっているだろう」というんです。これはあってはならないことです。

— 本当に心配です。

猪谷 これから女性スポーツというのは、もっともっと大事になってきます。というのもスポーツに理解のあるお母さんから生まれてくる子どもたちは、肉体的・心理的に強い子供を育てる事ができると思うんです。スポーツを通してそのような子を育てる事が大事なんです。

— ところで JOC は昨年 5 月に「ブライトン宣言」(1994 年に第 2 回世界女性スポーツ会議で採択された宣言) に署名し、2006 年には熊本で第 4 回世界女性スポーツ会議 (主催: JOC、NPO 法人

ジュース、熊本市) が開催されます。そのための「女性スポーツ・プロジェクト」(橋本聖子座長) を今年 5 月にスタートさせました。実際に女性の問題を解決していくには、何が必要でしょうか。
猪谷 やはり JOC の女性理事の数を増やすことでしよう。それには JOC 理事の枠をもう 5 人くらい増やして、会長推薦で女性理事を増やしたらいいんじゃないか。日本の、特に女性のスポーツ発展のためにつくせる人を選ばばいいんです。アメリカのオリンピック委員会 (USOC) は 2 代続けて女性の会長ですよ。

— そう、そうなんですよ。

猪谷 (シドニー) オリンピックの日本選手の数をみると、41% は女性ですから、役員の数も 20% なんて言わないで、もっと増やせばいい。女性が活躍している競技なら、現在のように 1 競技団体から 1 人といわずに、男女 1 人ずつ入れてもいいんじゃないですか。

男女同権というけれど

— 猪谷さんはトライアスロンにもかかわっていらっしゃるんですよね。

猪谷 私は世界トライアスロン連合 (ITU) の副会長と日本トライアスロン連合 (JTU) の会長をしています。トライアスロンのプライズマネーは男女同じです。男女同権のかわりに、ルールもコースも同じなんです。ITU も JTU も登録選手は女性が 2 割以上です。

— トライアスロンは非常にハードなスポーツなのに、女性はけっこう多いんですね。

猪谷 ただ男女同権といっても、女性にやってほしくないスポーツもあります。いわなくても分かると思うけれども、女性のボクシングなんて見たくもないし、やってほしくない。

反対に男性のシンクロナイズドスイミングなんかも、どうもねえ。リズムダンス (新体操) も男子がやって見栄えがするものなのか…。特殊なスポーツも例外としてあるということです。

— やるのは自由ですが、スポーツにはそれぞれ

特殊性があることも確かですね。そんな中で WSF ジャパンがどんな活動をしていけばいいのか、いつも考えています。

猪谷 20 周年というのは、人間でいえば成人式を迎えたわけですから、組織の中から三ツ谷さんのような人がもっと出てきていいんじゃないですか。たとえば全国を 10 ブロックくらいに分け支部を作り、1 スポーツ界で活躍できる女性の役員を 10 人置いて活動する。メダリストやオリンピックを使う方法だってあるんじゃないでしょうか。— そうですね。かつてのメダリストの方々は、なかなか WSF ジャパンの主旨を理解してくれませんでした。でも若い世代なら、かなり分かってくれるかも知れません。

猪谷 「女性役員を入れろ」というだけでは無意味であって、スポーツ界に対しての貢献を具体的に示すことが、主張を通す上で一番大事なのではないでしょうか。

日本の社会では、自分から仕掛けて出ていっても、なかなか受け入れられません。しかし建設的な意見をいっていくことが大切ではないでしょうか。

— 女性が重要なポジションについても、黙って座っているだけでは意味がありません。貴重なアドバイス、ありがとうございました。



「メダリストにも声をかけては」と猪谷さん(右) 左は三ツ谷代表 (東京・AIU 本社)

<猪谷千春さん略歴> 日本スキー界の草分け、猪谷六合雄氏を父に持ち、スキーの英才教育を受ける。1956 年 (昭和 31) のコルチナダンペツォ冬季オリンピックのアルペン回転で銀メダルを獲得。82 年から IOC 委員、89 年より JOC 理事を務める。米国ダートマス大学卒業。現在 AIU 名誉会長。

WSF ジャパン 20周年記念「女性スポーツセミナー TOKYO」開催 スポーツライター小原敏彦さんが人見絹枝を熱く語る

映像を交え偉大な先駆者の生涯をたどる

「女性スポーツセミナー TOKYO」は9月26日午後6時より東京・新宿の秩父宮記念スポーツ博物館で開催されました。3月の「OSAKA」に続くWSF ジャパン20周年の記念事業で、記念誌「日本女性とスポーツ 明治・大正・昭和から平成へ」の発行記念も兼ねています。

出席者は会員ほか、20周年記念誌広告の協賛企業担当者、マスコミなど約40人。三ッ谷洋子代表が20年を振り返って挨拶。続いてスポーツライターの小原敏彦さんが「新しい女性の生き方を示した天才アスリート—人見絹枝の25年の生涯をたどって」と題した講演をされました。

一般にはあまり知られていない数々のエピソードを、スライドや貴重な記録フィルムを使って話され、人見が日本の女性スポーツ草創期に果たした足跡の偉大さを、改めて思い起こしました。

会場となった秩父宮記念スポーツ博物館では、閉館後にも拘らず、セミナー参加者が展示を見学することができ、様々な形でスポーツの歴史にふれることができた、意義深い1日となりました。



人見絹枝の足跡を語る小原さん

(東京・秩父宮記念スポーツ博物館)

以下に、小原さんの講演の主旨をまとめました。多くの方に女性スポーツの先駆者・人見絹枝の生き方を知っていただきたいと思います。

スポーツに人生を捧げた人見絹枝

人見絹枝は明治40年(1907年)、岡山県福村に生まれました。当時、村から女学校に通う少女はいませんでした。「これからの女性は学問が必要」という父親の考えで、岡山高等女学校に入学します。テニスが盛んで、人見もテニスを始め、関西

地区で優勝して当時は「テニスの人見」として知られていました。しかし、卒業の年に脚気を患います。

この時期に朝日新聞主催の陸上の大会がありました。彼女は修学旅行にも行けない状態でしたが、選手に選ばれて病床から無理を押して出場しました。そこで走り幅跳びに4m67の日本新記録を出し、アスリートとして一躍脚光を浴びました。

卒業後は、岡山高女の和気校長の勧めで、二階堂体操塾に進みました。陸上の記録は順調に伸び、1年間の教程を終えて卒業後は体育の教員になるつもりでした。しかし、大阪毎日新聞運動部の木下東作部長声がかかり、「1つの学校の先生になるのか、日本の女子スポーツの先生になるのか」と説得され、結局、大阪毎日新聞に入社しました。

4カ月後、スウェーデンのイエーテボリで第2回女子オリンピック(国際女子競技大会)が開催されることになっていました。新聞社は出場を勧めますが、自分の力では世界と戦える訳がないと固辞します。しかし、「今、国際大会に出なければ、日本はいつまでたっても世界のレベルに追いつけない」と木下部長に説得され、参加することになります。派遣費用は新聞社が負担しました。

シベリア鉄道に乗って、イエーテボリまで約1カ月。監督もコーチもつかず、19歳の1人の旅。日記を読むと、さぞ寂しかったろうと思います。大会では2種目に優勝、2種目に入賞し、個人総合で最高点を取り、最優秀選手に選ばれました。大会に出るからには、日本女性として恥にならないよう、代表として選ばれてからは大変な努力をしました。前年には関東大震災があり、世情が不安定な時代でしたが、彼女の活躍は明るい話題として人々を勇気づけました。

その後の人見について、2つの話をしたいと思います。1つ目は1928年(昭和3年)の第9回アムステルダムオリンピック。近代オリンピックの創始者、クーベルタンは「女性の競技は女性の優美さを損なう」といっています。古代オリンピックでも女性の種目はありませんでした。

アムステルダム大会で、女性の陸上競技5種

目が初めて入りました。人見の得意な幅跳びはありませんでしたが、100mは12秒2の世界タイ記録を持っていたので自身がありました。

予選はトップで通過。しかし、準決勝でよもやの4着で敗れ、奈落の底に突き落とされたような衝撃を受けます。日記に「このままでは日本に帰れない。この恥を何とか拭わなければならない」と書いています。

日本からの女子選手は1人で、800mにもエントリーしていません。800mは持久力が必要で、100mとは全く別の競技といえるくらいに違います。しかし、人見は竹内監督の反対を振り切り、これに賭けました。予選を通過して決勝に進出。スタートダッシュをした人見が20mほど他を引き離します。応援席の日本選手団から「下がれ、下がれ」と声がかかり、2周目に入った頃は5着です。

短距離ランナーでは盛り返すのは不可能と思われましたが、第3コーナーで3位、第4コーナーでは2位。ホームストレートではトップのラトケ(ドイツ)にあと15mまで迫りました。竹内監督から「最後に余力があれば追い抜け。脚が疲れたら腕を振れ。振って振って、振りまくれ」と指示されていた人見は必死に腕を振り、ラトケとほとんど同時にゴールインしました。

ラトケが倒れ、続いて人見を含む全選手がバタバタと倒れました。人見のタイムは2分17秒4の世界新。予選より10秒も速い記録でした。人見のがんばりに刺激を受けた織田幹雄と南部忠平は、続く三段跳びで活躍、織田は日本初の金メダルを獲得しました。

各国の新聞は人見を大きく取り上げ「きれいな着物を着込んで、茶の湯と生け花に忙しく、繊細で弱々しい体をしている」という日本人の女性観を根底から覆したと報じました。しかし、この800mレースは「死の激走」と呼ばれ、「女子に800m以上の距離は無理だ」と、1960年のローマ大会まで32年間、行われませんでした。

チェコ国民が愛した「ヤボン、ヒトミ」

人見に関するもう1つの話は、毎日新聞運動部記者としての働きぶりです。夜は午前1時~2時までが当たり前という大変な仕事でした。記者として仕事をしながら、選手としても大会に出ているわけですが、自分1人では日本の女子スポーツ

は発展しないと、昭和5年(1930)のチェコ・プラハの第3回女子オリンピックでは、若い5人の選手を連れていくことにしました。ここで遠征費の調達に大変苦労します。

1人3千円。土地付きの家が買える金額です。5人分で1万5千円。女性が大会に出るということで、女学生を対象に「10銭募金」を始めます。新聞記者として取材し記事を書き、寸暇を惜しんでオリンピック選手として練習し、若い選手を育て遠征費を調達する。何でも来いの心意気です。

その他、本を5冊出し、短歌も得意で200首ほど残しています。岡山高女の先生は「女流歌人になると思った」そうです。

この遠征では若い選手に経験を積ませるため、ヨーロッパ各地を転戦しました。人見は、マネージャー兼監督兼コーチです。女子オリンピックでは、若い選手たちが海外の強豪と戦う力がなかったため、風邪を引きながらも注射を打って、全種目に出場しました。

4カ月の遠征の後、神戸港に着いた人見を出迎えた父親は、あまりに痩せた姿に愕然とし「休んだ方がいい」と声をかけます。しかし、翌日から講演日程がびっしりと組まれていました。遠征協力へのお礼と、スポーツの啓蒙のため、断ることはしませんでした。やがて扁桃腺炎に罹り、吸入器を持ちながら各地で講演。翌年3月に咯血して入院、4カ月後に過労による乾酪性肺炎(結核)のため、24歳7カ月で亡くなりました。

時の駐米大使は「100人の外交官にも匹敵する活躍であった」と、その偉業を称えました。プラハ郊外のオルシャンスケ国立墓地には、人見絹枝の記念碑があります。「愛の心を持って世界を輝かせたに感謝の念を捧げる チェコスロバキア体育協会」とあり、いつも花が飾られています。

チェコの3日間の大会では7種目に出場したのですが、最後は足を引きずるようにして走りました。客席は「ヤボン、ヒトミ」と大声援を送りました。プラハ市内のパリ通りの脇に「ヒトミロード」があります。そしてチェコの年間女子最優秀選手には、「人見絹枝杯」が授与されています。<小原敏彦さん略歴> 埼玉の県立高校校長等を経て、スポーツライター。主な著書に「人見絹枝物語」(朝日新聞社)「燃ゆる大車輪」(エコー出版)などがある。1939年生まれ。